

●野田正彰『災害救援』岩波書店（岩波新書）、1995年

人は災害によって三つのものを失う可能性がある。家と地域社会と家族である。三つとも失ったのが、ナチス支配下のユダヤ人生存者などであった。世界中の難民は、家と近隣を失って、家族だけで流出している。家族の何人かは途中で死亡している。自然災害で家を失った人には、残された二つのよりどころをさしあたって強化してあげる必要がある。

そのためには、どんな援助が考えられるだろうか。例えば、家族のアルバムを再現する援助はどうだろうか。親族や友人が協力すれば、その家族の写っている写真はかなり集まるものだ。マスコミが呼びかけ、フィルム会社が協力して、親族の誰かが中心となり、その家族のアルバムを届ける。アルバムの再現の過程に、かかわった人と被災者との心の交流がある。そして、アルバムを受けとった被災家族は、小さな過去の写真の何枚かを通して、家族のアイデンティティを守っていくだろう。（28頁）

災害は予防するにこしたことはない。しかし、予防できなかった被害に対しても無力であっていいわけではない。事前の防策対策とともに、災害救援の文化を創っていかねばならない。精神的な指示を中心とし、物質的援助をそのための補助と考える災害救援の文化が創られるならば、不幸な災害を通してでも、人間社会を信頼することができるようになる。災害の受け止め方に、私たちの社会のやさしさが表されるからだ。（31-32頁）

被災者にとって、再建とは旧に戻ることではない。喪った家族は絶対に戻ってこない。立ち戻るには理想がなければならない。災害にあったが、人と人とのきずなは、この社会は、信じられるという思いが不可欠だ。救援者が贈ることのできる最高の贈り物はその思いである。義援金はその思いの一部にしかすぎない。（58頁）

上海列車事故では遺体とともに帰ってきた遺族の写真を撮るため、カメラマンたちの殴りあいまで起きた。私は、ほかに報道することはある、横並びに競争しかねないときこそ独自の視点を考えよ、と批判し続けた。（104頁）

なぜ、自分たちが騒いでいるのか、テレビ関係者はわかっているのだろうか。

自然の凄まじい暴力に直面して、人間は恐怖心を抱く。少数の人はそこで打ちのめされるのだが、多くの人々は自然の暴力に対抗して演技しようとする。自然に敗けまいと興奮し、動き回る。炎の前でうわずった声をあげるレポーターは、その最たるものである。だが地震を巨大なナマズか怪物のように生物化し、虚しい乱舞を繰り広げたところで、何の意味もない。（109頁）

●酒井道雄編『神戸発 阪神大震災以後』岩波書店（岩波新書）、1995年

そんなある日、あちこちの市町村や温泉地が一、二泊から数週間、被災者を無料招待してくれる、という新聞記事を見つけた。看護婦詰所でも「行きたいわねえ」「ショックが大きかったよだから、Aさん行かせてあげたいわ」などの会話がはずんでいた。

カナダ、ニュージーランドの地方政府やボランティア団体が、被災者受け入れの低料金ツアーを募集していると聞いたのは、いつごろだったか。私には応募はとうてい不可能だが、行かせられるものなら、毎日さみしく留守番している子どもたちを参加させてやりたい、これこそ、ほんとうに被災者の気持ちがわかったやり方だと、感動した。

それは現実からの逃避かもしれないが、“日常的ではない”苛酷な状況が日常化したとき、一時的にせよ、そこから抜け出すことで癒されるものは大きいのではないだろうか。

（道上圭子「地域はもう一つの病棟—医療の現場から」22頁）

「すさまじいエゴのぶつかりあい、ボランティアするのがいやになった」

四月初めのある日、半壊の自宅から毎日近くの避難所に通っているTさん（65歳）がツリと漏らした。

譲り合い、助け合うことで保たれていた避難所の雰囲気は一変した。震災直後、校舎内に満ちていたやさしさは薄れかけている、とも言う。“公認”避難所の住民と、避難所に入れなかった被災者との対立も深刻化している。後者には援助物資はもちろん、電気や水の供給さえ拒否して対立をあおった行政の責任は大きい。

曲がりなりにも最初の一ヶ月余り、人々はやさしくいたわりあっていた。それを醜い“奪い合い”に変えた要因は何だろうか。

遅々として進まない仮設住宅建設。希望の容れられない画一的な抽選の仕組み。せっかく当選しても勤務先夜学校とあまりにも遠く離れてしまい、移転の決心がつかない人。入居した仮設住宅から舞い戻ってくる人さえ出てきた。

（酒井道雄「立ち上がる市民、自治会」137-138頁）

その日から、N先生は、ひまを見つけては校区を歩きはじめた。中学生だけでなく、小学生や高校生の表情、動作に目を配り、さりげなく話しかける毎日が今も続いている。

「震災ショックで“いじめ”がなくなった、という外部の声がある。とんでもない。隙間だらけのおとな社会で、いまなら何をしても許されると勘違いする子さえいる。それを未然に、とりあえずプラス・マイナス・ゼロまで引き戻すのが、教師の仕事ですよ」

（有井基「地域が学校になだれ込んだ」161頁）

しかし、今回の震災救援活動に参加したボランティアの活動を、すべて肯定的にとらえることには問題が残る。

自分の活動スタイルを他に押しつけ、自己を絶対化したり、ボランティアとはやりたいことをやりたいだけやればよいとのわがままを通し、ボランティア仲間のみならず被災者へ多大な迷惑をかけたケースもあった。

反対に、あまりにも自己犠牲的な行動に走りすぎ、肉体的にも精神的にも燃えつき、健康をくずした例。また救援活動にほんの少しだけ顔を出し、あとはタダメシを食らい宿泊費も浮かし、被災地見学ツアーを楽しむという不心得者も散見された。

このほかにも、被災者を救援対象とし、ひたすら応援、支援、救援活動に徹し、結局、被災者の自律、自立、自主を阻害し、依存、甘えを助長したボランティア活動もあった。

(草地賢一「市民とボランティア」174頁)

あるシンポジウムで知人の大学教員から、つぎのような体験を聞いた。

「私は地震直後六時間、倒れた家の下敷になっていた。隣にいた妻は絶命した。米国にいた娘は急を聞いて、すぐ空港に走った。チケットカウンターで事情を話すと、係の女性がそくざに、原価ではないかと思われるほど安価にチケットを発行し、どの航空会社でもよい、最優先で乗せると言ってくれた。

緊急、非常事態に、このような措置をとる権限が現場のスタッフに与えられているのに驚かされた。それに比べると、日本の被災地の行政は、まさに正反対だった。「例外的判断と措置」がまったくといっていいほどとれない。条例にもとづくマニュアルにないことに対処できない“硬直性”が、事態をいっそう悪化させた」

(草地賢一「市民とボランティア」176頁)

●金子郁容『ボランティア～もうひとつの情報社会～』岩波書店（岩波新書）、1992年

ボランティアとは、その状況を「他人の問題」として自分から切り離れたものとはみなさず、自分も困難を抱えるひとりとしてそのひとに結びついているという「かかわり方」をし、その状況を改善すべく、働きかけ、「つながり」をつけようと行動する人である。

(65頁)

情報というものはすでにどこかに「あるもの」と考えるのが、静的情報の考え方である。それに対して、情報とは相互作用のプロセスの中から「生まれてくるもの」とするのが動的情報の考え方である。静的情報、動的情報という考え方をするのは、情報を分類することが目的ではなく、対照的な二つの方向から光を当てることで、情報を立体的にとらえるためである。

(122頁)

(2011年3月22日 上野)